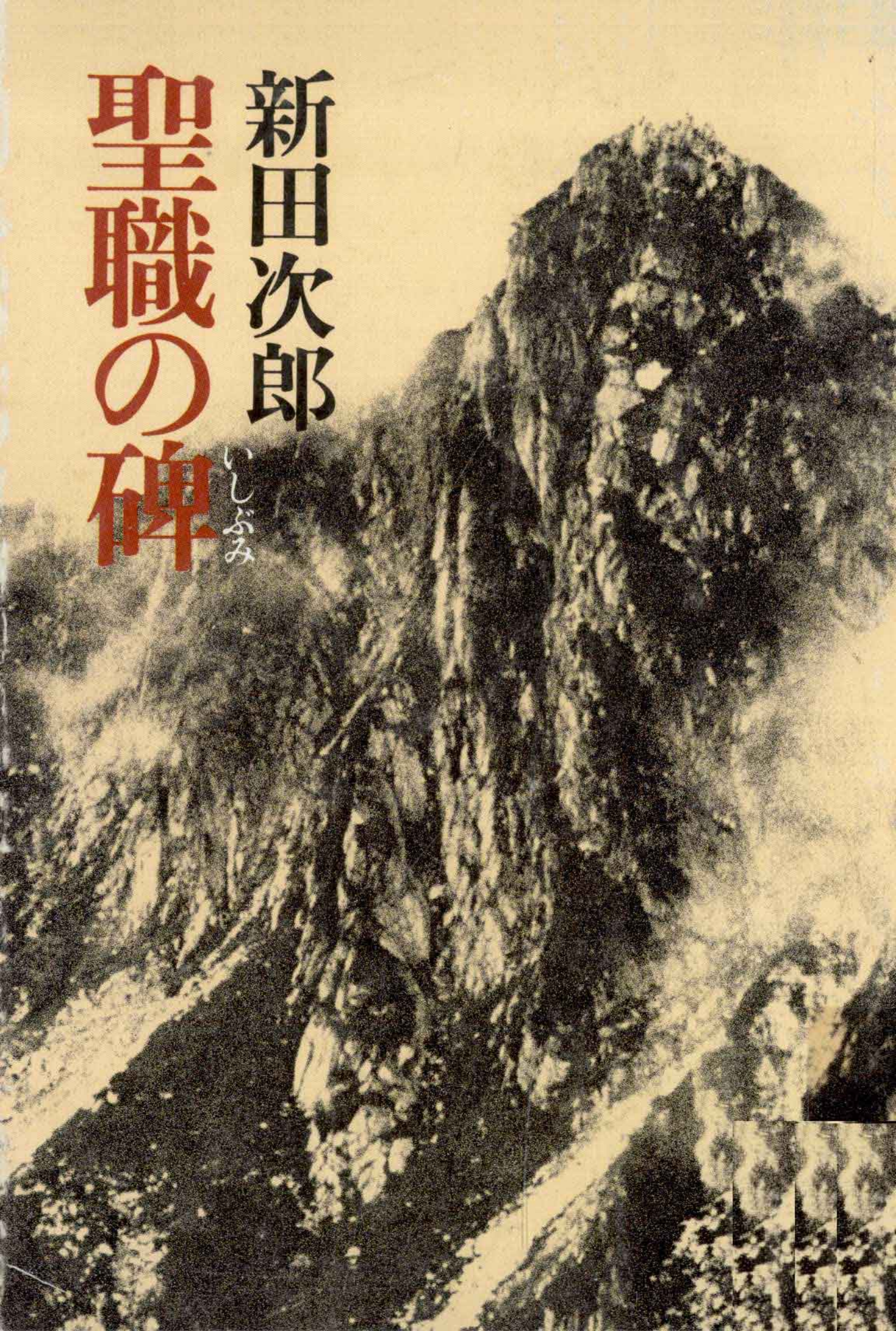
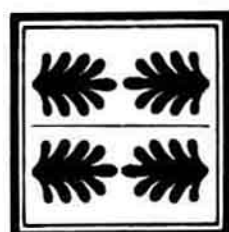


新田次郎

聖職の碑

いしぶみ





講談社文庫

聖職の碑^{いしふみ}

新田次郎

昭和55年12月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Tei Fujiwara 1980

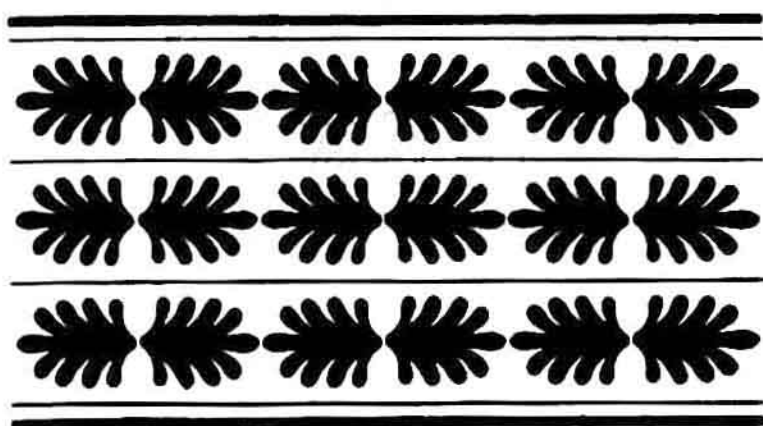
Printed in Japan

0193-316567-2253 (0) 定価 440円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

いしぶみ
聖職の碑

新田次郎



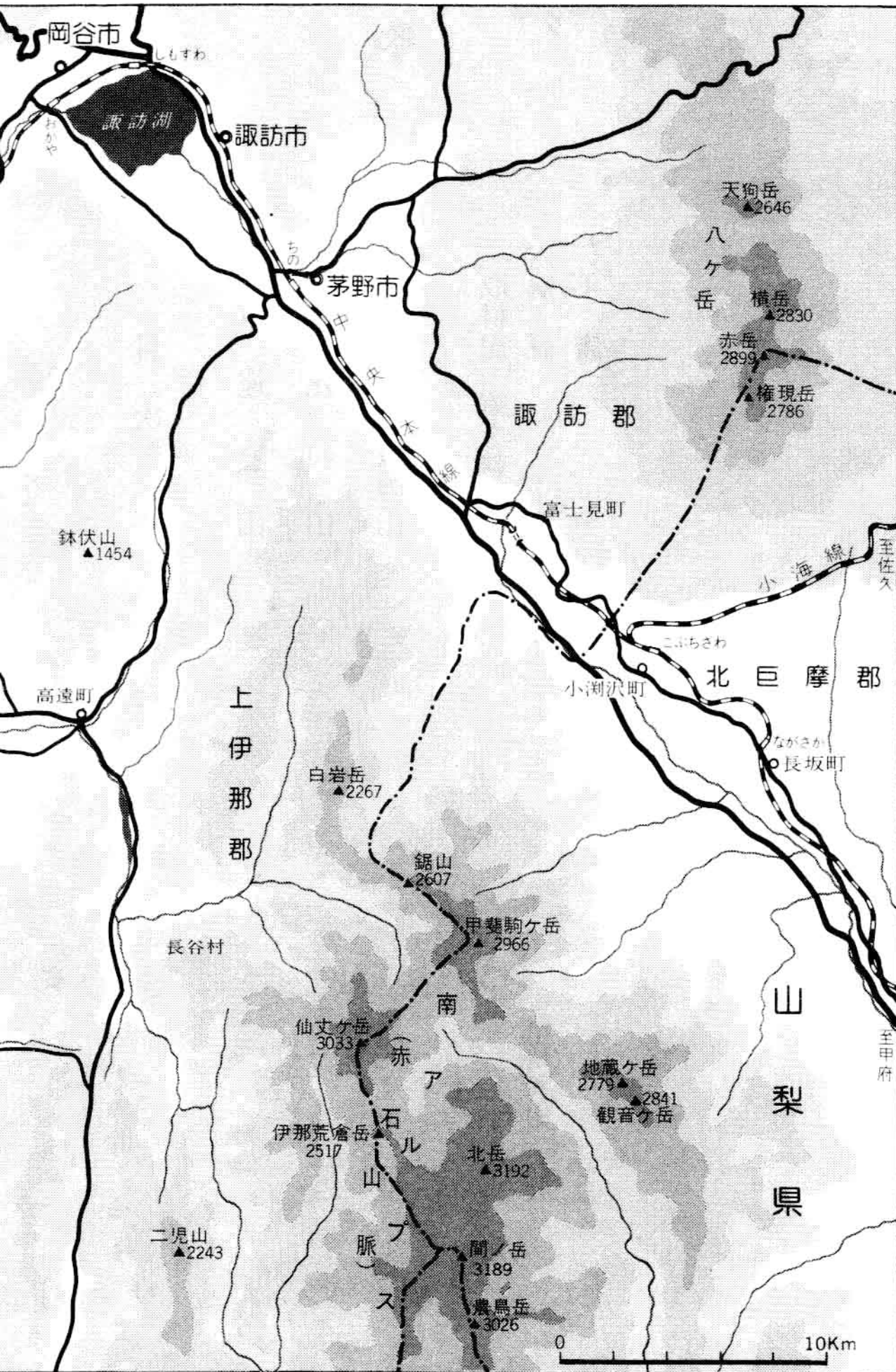
講談社

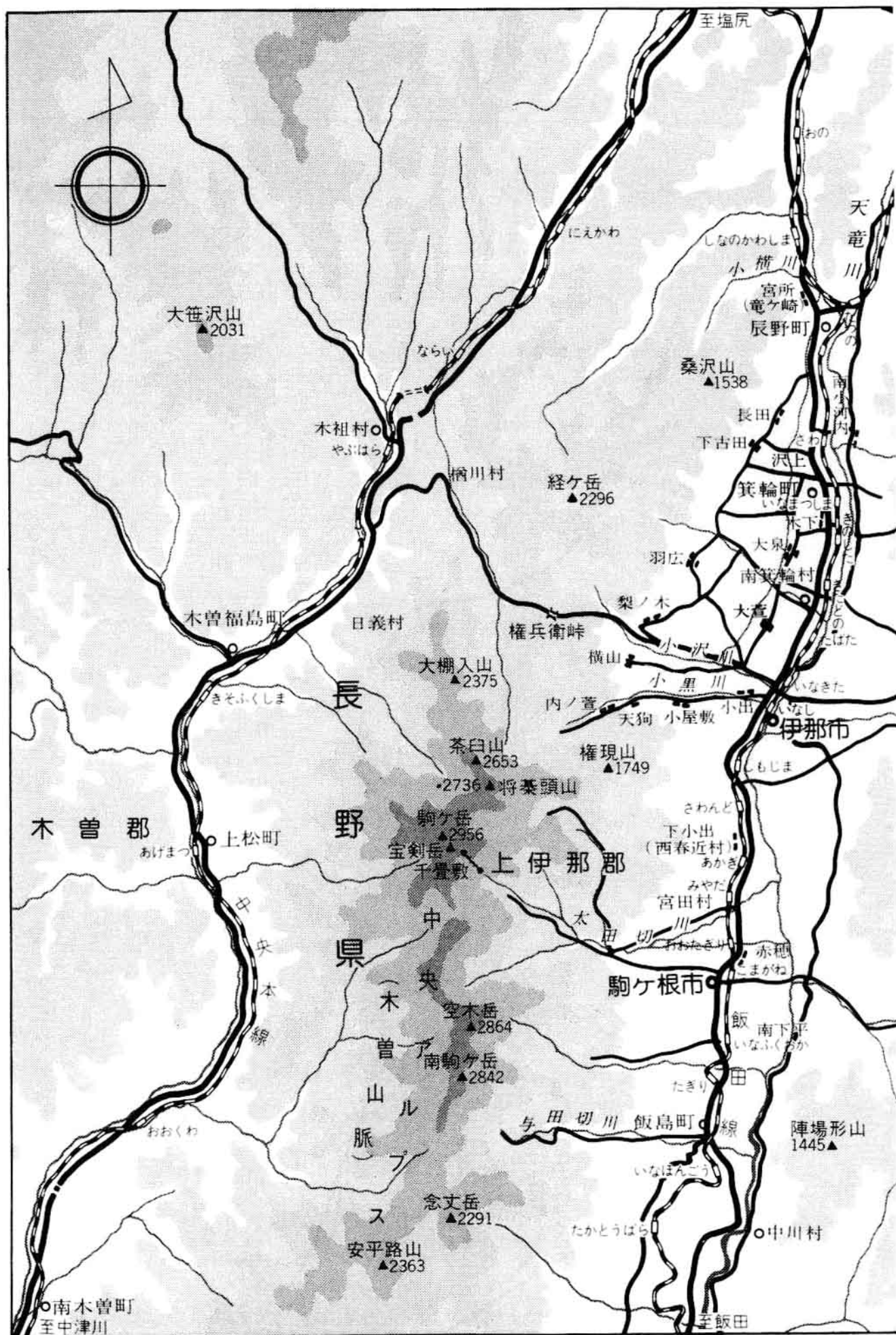
目次

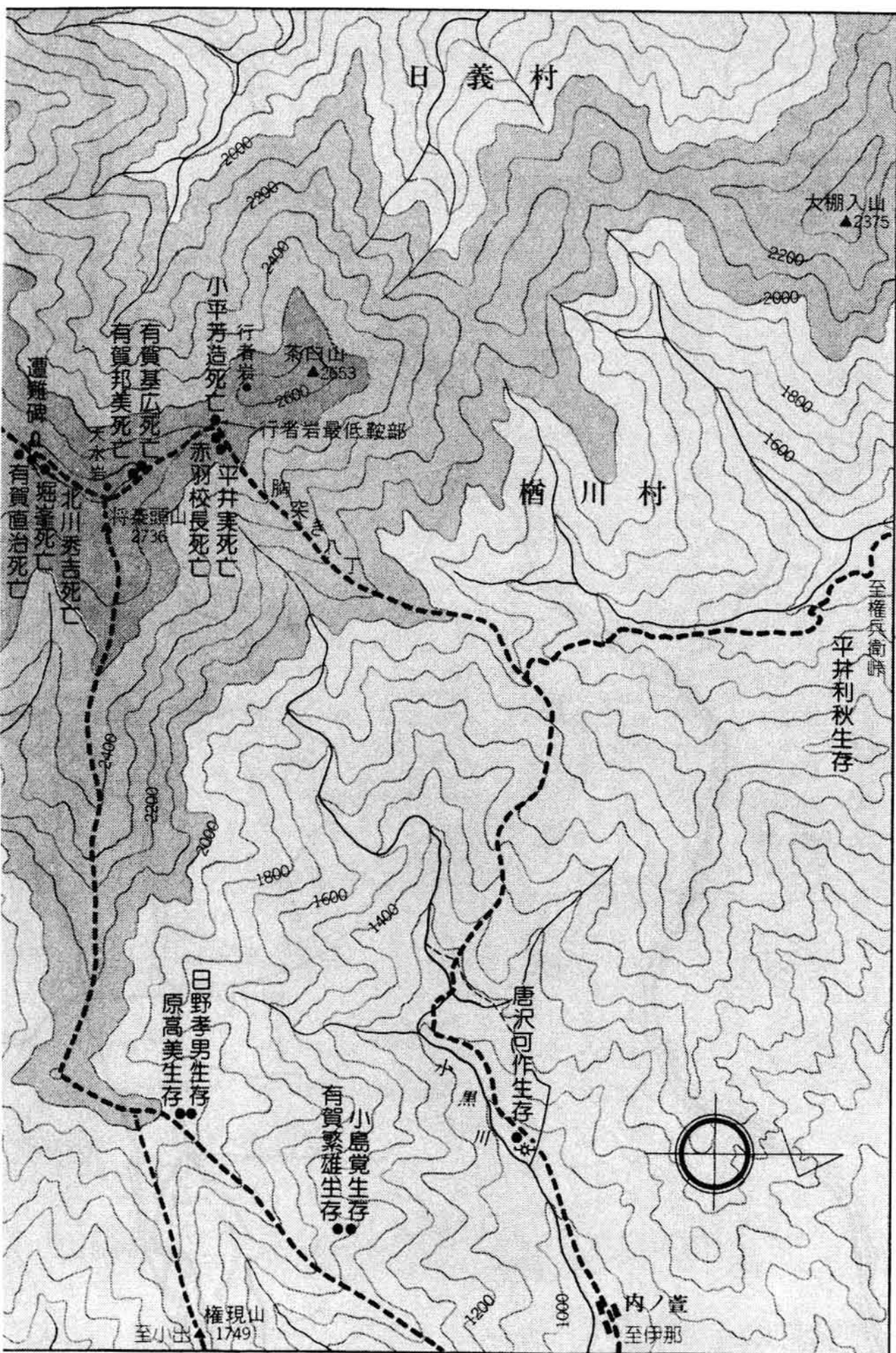
第一章	遠い山	一七
第二章	死の山	一〇五
第三章	その後の山	一九三
取材記・筆を執るまで		二九三
解説		三五八
年譜		三六四

尾崎秀樹

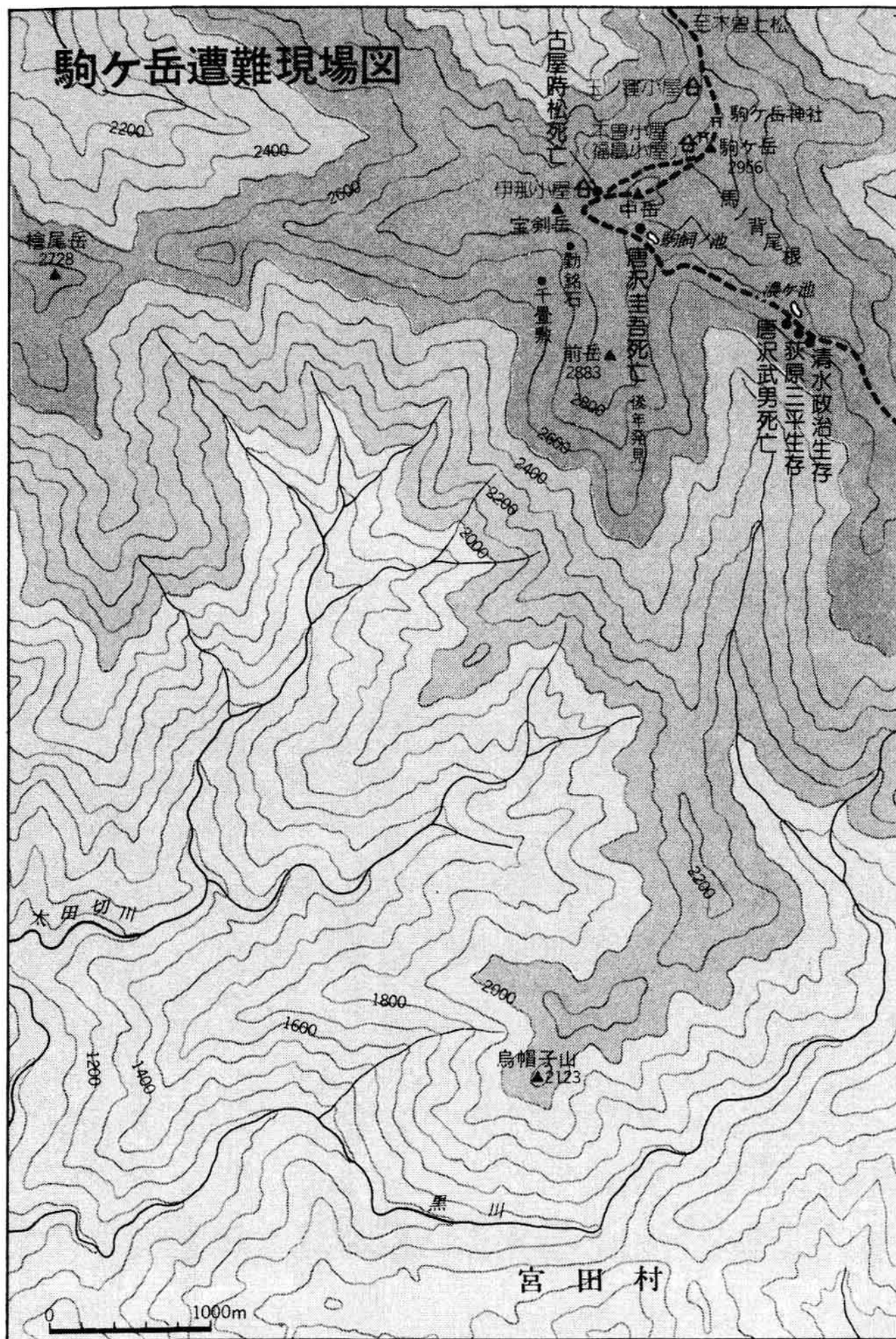
一七
一〇五
一九三
二九三
三五八
三六四







駒ヶ岳遭難現場図



聖職の碑いしおみ

霧が稜線を覆いつくすと、数メートル先がおぼろに見える。霧の移動がはげしくなればなるほど霧は濃くなり、雨具に附着する水滴も大きくなる。

吹き抜けて行く霧風の音がなんとなく物淋しいので、つい心細くなって声を出してみても、それさえたよりなく這松の中に沈んで行った。

あたりがひどく静かなのに、谷底へでも引きずりこまれるような、一定振幅の低音が、耳鳴りのように連続して聞こえるのは、雨具の頭巾を深くかぶりすぎているのかもしれないし、或は霧が立ちこめて、目に見えない壁を作ったがための音の反響かとも考えられるので、彼は濡れるのもかまわず、雨具の頭巾をうしろに払いのけた。やはり頭巾をかぶったせいだった。耳鳴りは消え、尾根を吹き渡る風の音がよく聞こえる。

「三千メートルに近い駒ヶ岳の尾根だけのことはある」

彼はつぶやいた。彼は山に來たときはよくひとりごとをいう。下界では絶対にないことだが、環境の変化によるためか、或は、黙々として一日中ひとりで歩かねばならない折の無聊むがうちを自らなぐさめるためかもしれない。一人でなく誰かと歩いていてもこの癖は出る。もともと登山中はしゃべらないのが常識だから、ふとなにかのはずみに彼の口が開いたときはひとりごとになるのである。従ってそのひとりごとには意味がない場合が多い。三千メートル近い駒ヶ岳の尾根筋だ

からどうだこうだというのではなく、彼は今、そこにいる自分を確認したいがためにその言葉を口にしたのであった。

霧の流れが早くなると、道の両側の這松の葉先に光っている露がこぼれ落ちる。霧に覆われているため、夕暮れ時のように暗い山嶺に、密生している這松の、谷側に向って伸ばしたその葉先にだけ光が集められたように、露のこぼれ落ちるときは一瞬の輝きが、確かに起るのである。

彼は、こぼれ落ちるその露を靴先で受けながら、こんなばかげたことを、若かりしころはよくやったものだと思ひながら、目を山道の先に伸した。なにかしらの明るさが前方に拡がったように感じたからだ。足もとに落ちた露が光ったのも、その明るさがあつてのことかもしれない。

明るさは進むに従つていよいよ拡がり、そして、霧の移動ではなく、はつきりと風の音を耳にしたとき、それまで前方を閉じていた霧が霽れた。彼が立っているその尾根の一点から小さな鞍部をへだてた対称的な位置まで、霧が薄れかけているというよりも、地形的にその鞍部のあたりの風が強いので、霧は吹きちぎられて、そこに空洞ができたようだった。

彼は、その鞍部から少々上ったところに雪溪を見た。見たように感じたとき、再び濃い霧に閉され、なにも見えなくなった。

八月の半ばである。雪溪が尾根にあるなどということがあろう筈がなかった。

「だが、おれは雪溪をこの目で見たのだ」

彼はひとりごとを云った。雪溪ではないがあれはいつたいなんだろうという興味が彼の足をはやめた。しかし鞍部にかかったとき、雪溪に見えた正体は、多分花崗岩（かこうがん）のがれ場（岩石の崩壊し

た跡）だろうということに気がつき、別に急ぐ必要もなくなり、ゆっくりと石ころの登り坂に踏みこんで行った。

そこはがれ場というほどの急斜面ではなかった。尾根の一部であったが、やや幅広く白い大地をむき出していた。尾根を覆っている這松地帯の中に、白い小さな島ができたように見えた。風当りが強すぎるため植物が生えないのだろうと考えられた。花崗岩の白い砂地に大きな岩石が点在していた。霧を通してみると、それは熊かなにかが蹲うずくまっているようである。その岩の中に一段と大きな四角い岩があった。どこかに人工を感じさせる岩だった。

彼はその岩の前に立った。霧が彼とその岩との間を絶間なく通り過ぎて行った。

それは自然石で作った碑であった。石の中央に「遭難記念碑」と深く刻まれその文字の右側には、

大正二年八月二十六日、中箕輪尋常高等小学校長赤羽長重君は修学旅行のため児童を引率して登山し、翌二十七日暴風雨に遭って終に死す。

と書かれ、「遭難記念碑」の左側には、

共殯者

堀 峯 唐沢武男

唐沢圭吾 古屋時松

小平芳造 有賀基広

有賀邦美 有賀直治

北川秀吉 平井 実

大正二年十月一日 上伊那郡教育会

と刻みこまれてあつた。既に六十年も経過しているのにもかかわらず、文字の一字一字がはつきりと読み取れた。

彼は碑文を読んで概要を知り、同時に一種異様な感動に打たれた。

「このような場合、一般的には遭難慰霊碑とするのが当り前なのに、なぜ、遭難記念碑としたのであろうか」

彼は碑に向つて問うた。

碑文には死者の霊をなぐさめるような言葉はいっさい使われていなかった。校長であり引率者であつた赤羽長重^{ながしげ}については、終に死すと簡単に片付けられ、彼と運命を共にした少年たちは「殉難者」でも「若くして逝つた人々」でもなく、「共殯者^{きようえい}」であつた。暴風雨に遭遇して赤羽校長と共に殯^{たお}れて死んだ人達という意味のほかなにもものもなかった。

碑は遭難の事実だけを後世に告げるために建てられたもののようであつた。碑の最後に刻みこまれた上伊那郡教育会の七字は碑文や遭難者氏名よりも一段と大きく深く刻みこまれていた。それはまさしく、碑についてのいっさいの責任は上伊那郡教育会が引き受けようと、居直つた恰好にも見えるのである。

「この遭難の陰にはいったいなにがあったのであろうか。記念碑には、遭難事件を悲しむより、遭難そのものを、記念すべきできごととしようという意図が明らかに浮き彫りされている。それはいったいなぜであらうか」

彼は碑に向って質問しながら碑の下を見た。既に枯れ果ててはいたが、山麓から持って来て捧げたと思われる花束が幾つか置かれていた。

霧が濃くなるとまず碑文が見えなくなり、最後に遭難記念碑の文字も灰色に塗りつぶされ、そこには四角な石の輪郭だけが取り残された。